【漁況】
[マアジ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のマアジの漁獲量は，昭和40年の53万トンをピークに減少傾向となり，昭和55年には5万4千トンとなりました。
その後増加傾向に転じ，平成8年には33万トンに増加し，平成10年までは30万トン台で推移しましたが，再び減少傾向に転じ，平成29年は14万5千トンとなりました。

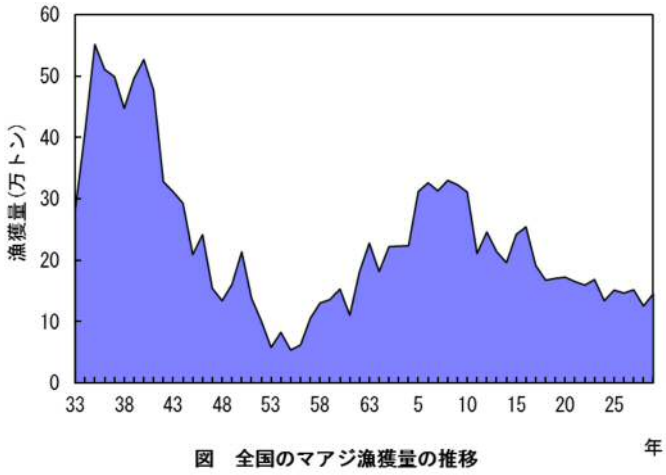

図　全国のマアジ漁獲量の推移

2. 県内の令和元（2019）年 10 ～ 12 月期の漁況の経過

【4 港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では，甑島周辺，串木野沖，長島（内海）でマアジ仔，小（0 ～ 2 歳魚：2017 ～ 2019 年生まれ）主体に漁場が形成されました。

薩南海域では，野間池沖でマアジ豆（0 ～ 1 歳魚：2018 ～ 2019 年生まれ），屋久島南東でマアジ中（2 ～ 3 歳魚：2016 ～ 2017 年生まれ），志布志沖でマアジ中小（1 ～ 3 歳魚：2016 ～ 2018 年生まれ）主体に漁場が形成されました。

4 港計のまき網では，期全体で 358 トンの水揚げで，前年の 32 %及び平年の 65 %と低調に推移しました。

3. 県内の令和 2（2020）年 1 ～ 3 月期の見とおし

漁獲主体：マアジ豆，小（1 ～ 3 歳魚：2017 ～ 2019 年生まれ）
来 遊 量：低調であった前年を上回り，平年を下回る

（根　拠）

漁獲の主体は，近年の漁獲パターン等から予測しました。

来遊量は，直近の漁獲動向から予測しました。前期（10 ～ 12 月）と今期（1 ～ 3 月）の漁獲量には正の関係があります。この関係に基づくと，今期の来遊量は 1988 年以降もっとも漁獲が少なかった前年を上回り，平年を下回ると考えられます。

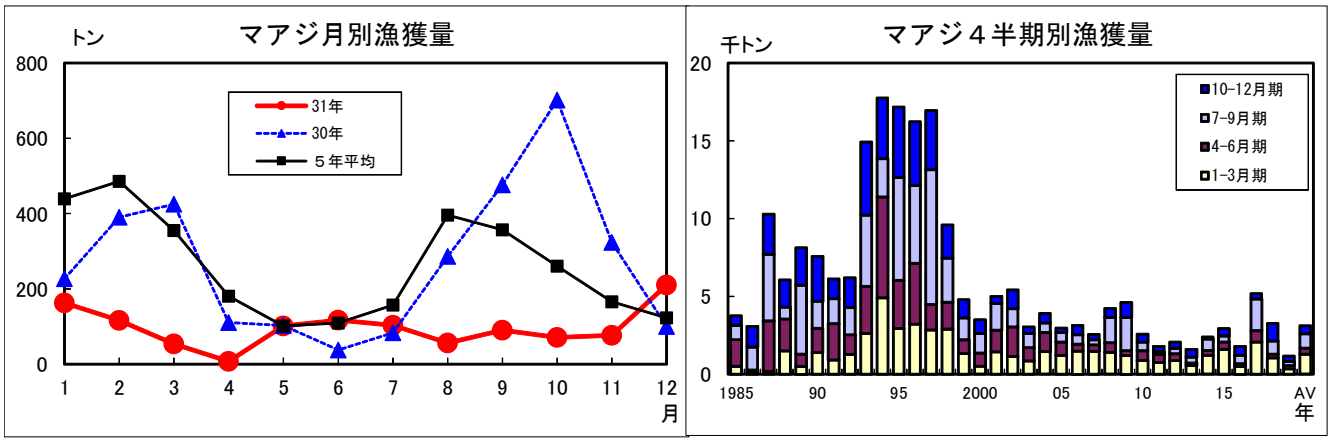

図 マアジまき網漁獲量変化(4 港計)

※平年値は過去 5 年の平均値(AV)，令和元（2019）年 12 月 25 日までの水揚量を使用

［サバ類］

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のサバ類の漁獲量は，昭和53年の160万トンをピークに年々減少し，平成3年には26万トンとなりました。

平成5年から増加に転じ平成9年には85万トンとなりましたが，平成14年には28万トンまで減少しました。

平成18年に65万トンまで増加したあと減少傾向となりましたが，平成29年は51万8千トンとなりました。

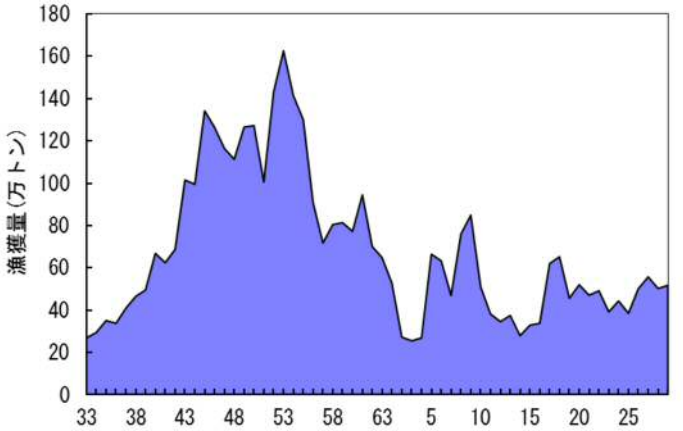

図　全国のサバ類漁獲量の推移

2. 県内の令和元（2019）年 10 ～ 12 月期の漁況の経過

【4 港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では，甑島周辺，津倉でマサバ豆，ゴマサバ豆（0，1 歳魚：2018，2019 年生まれ）およびマサバ大（3 ～ 5 歳魚：2014 ～ 2016 年生まれ）主体の漁場が形成されました。

薩南海域では，10，11 月に坊津沖，野間池沖でマサバ豆，ゴマサバ豆（0，1 歳魚：2018，2019 年生まれ）主体の漁場が形成されました。12 月に湯瀬，黒島，草垣でゴマサバ中，中小（3 ～ 6 歳魚：2013 ～ 2016 年生まれ）主体の漁場が形成されました。

4 港計のまき網では，期全体で 3,083 トンの水揚げで，前年の 68 %及び平年の 106 %と前年を下回って推移しました。

3. 県内の令和 2（2020）年 1 ～ 3 月期の見とおし

漁獲主体：ゴマサバ中，中小（2 ～ 5 歳魚：2015 ～ 2018 年生まれ）
　　マサバ中，中小（3 ～ 7 歳魚：2013 ～ 2017 年生まれ）※期後半

来 遊 量：前年を下回り，平年並

（根　拠）

今期は，竹島や馬毛島，種子屋久周辺でゴマサバの産卵群が主体となります。これらの海域は太平洋，東シナ海両系群の資源量と正の関係がありますが，東シナ海系群は横ばい，太平洋系群は減少傾向を示していることを考慮すると，ゴマサバの来遊量は前年を下回ると考えられます。一方，マサバについては，太平洋系群において，卓越年級群が発生した 2013 年以降も大きく増加しており，近年春に多獲されるようになった南下群の来遊があると考えられます。サバ類全体としては，前年を下回り，平年並になると考えられます。

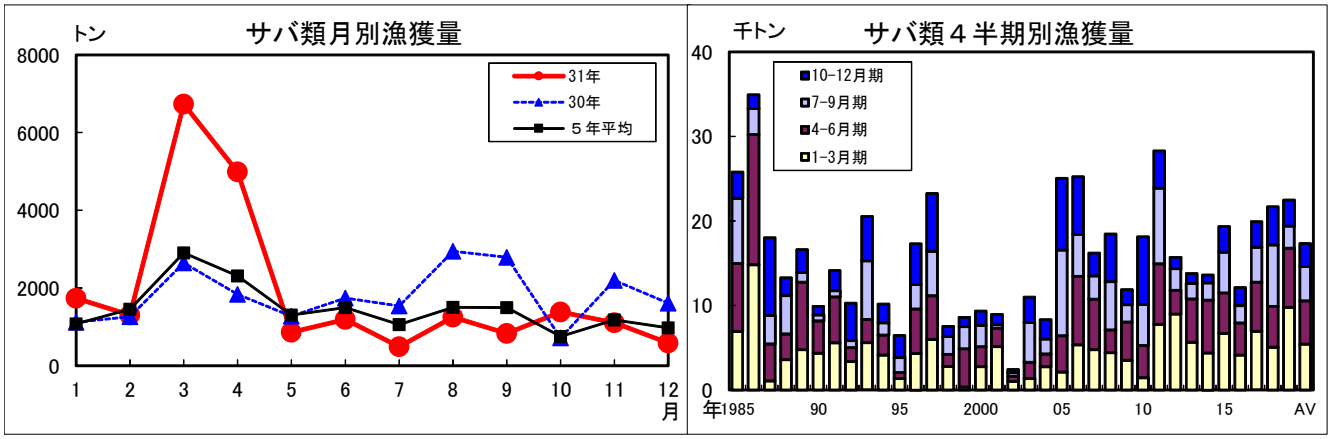

図 サバ類まき網漁獲量変化(4 港計)

※平年値は過去 5 年の平均値(AV)，令和元（2019）年 12 月 25 日までの水揚量を使用

［マイワシ］

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のマイワシの漁獲量は，昭和30年代から40年代にかけての不漁期の後，昭和48年頃から増加の傾向が見られ，昭和63年には449万トンまで増加しました。

平成元年以降，全国的に漁獲量は減少を続け，平成14から22年までは，10万トンを下回る低い水準で推移していていましたが，平成23年以降は10万トン以上に増加しました。

さらに、平成25年以降は20万トンを超える漁獲が続き，平成29年には50万トンとなりました。

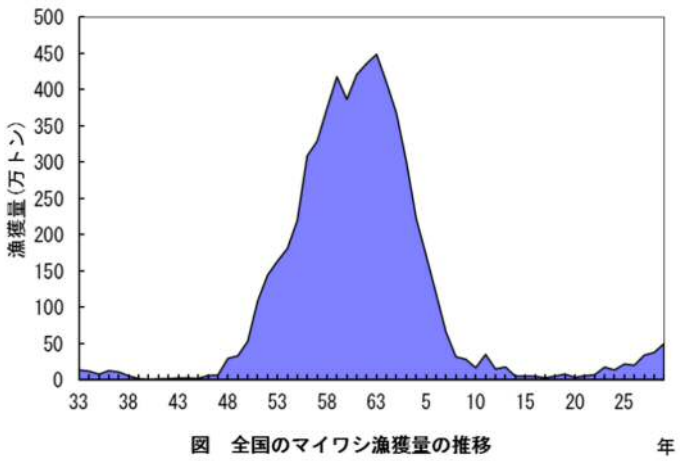

図　全国のマイワシ漁獲量の推移

2. 県内の令和元（2019）年 10 ～ 12 月期の漁況の経過

【4 港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦)】

北薩海域のまき網では，漁場は形成されませんでした。

薩南海域のまき網では，漁場は形成されませんでした。

北薩海域の棒受網では，まとまった水揚げはありませんでした。

4 港計のまき網では，中羽（0 歳魚：2019 年生まれ）主体に 1 トンの水揚で前年の 2 %，平年の 0 %でした。

3. 県内の令和 2（2020）年 1 ～ 3 月期の見とおし

漁獲主体：中羽（1 歳魚：2019 年生まれ）

来 遊 量：非常に低調であった前年並で，平年を下回る

（根　拠）

漁獲の主体と来遊量は，現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

本年は，前年に引き続き非常に低調に推移していることから，来遊水準は前年同様ほとんど見込めないと考えられます。

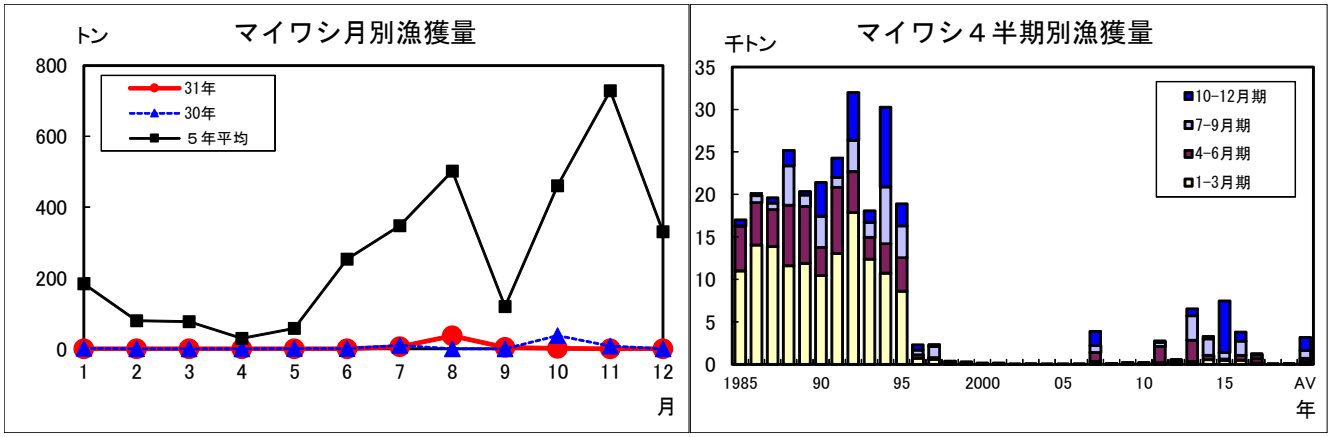

図 マイワシまき網漁獲量変化(4 港計)

※平年値は過去 5 年の平均値(AV)，令和元（2019）年 12 月 25 日までの水揚量を使用

[ウルメイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のウルメイワシの漁獲量は，昭和30年代以降，増減を繰り返しながらも増加傾向を示し，平成6年に6万8千トンとピークを迎えた後，減少傾向に転じ平成12年には2万4千トンまで減少しました。

平成15年以降は再度増加傾向に転じ，平成28年は9万8千トンで昭和33年以降では最高の漁獲量となり，平成29年は7万2千トンと減少したものの，高い水準を維持しています。

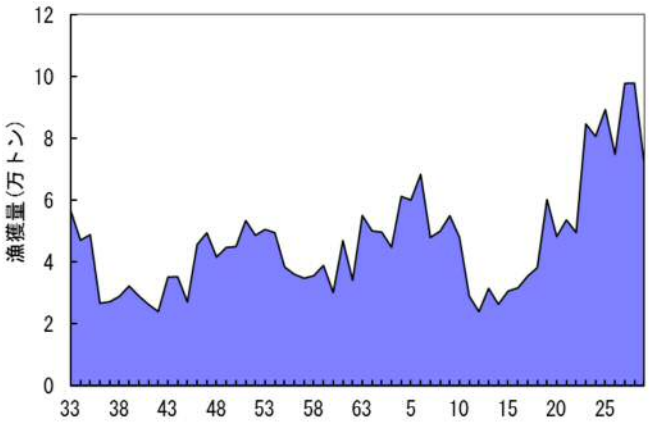

図　全国のウルメイワシ漁獲量の推移

2. 県内の令和元（2019）年 10 ～ 12 月期の漁況の経過

【4 港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では，津倉で漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では，坊津沖で漁場が形成されました。

4 港計のまき網では，1,658 トンの水揚げで，前年の 70 %，平年の 55 %でした。

北薩海域の棒受網では，小～中羽（0 歳魚：2019 年生まれ）主体に 225 トンの水揚で，前年の 51 %，平年の 42 %でした。

3. 県内の令和 2（2020）年 1 ～ 3 月期の見とおし

漁獲主体：中～大羽（1 歳魚：2019 年生まれ）

来 遊 量：前年を上回り，平年並

（根　拠）

漁獲の主体と来遊量は，現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

来期の漁獲の主体となる 1 歳魚（2019 年生まれ）は，漁獲に加入した 5 月から前年を上回り，平年並で推移していることから，前年を上回り，平年並になると考えられます。

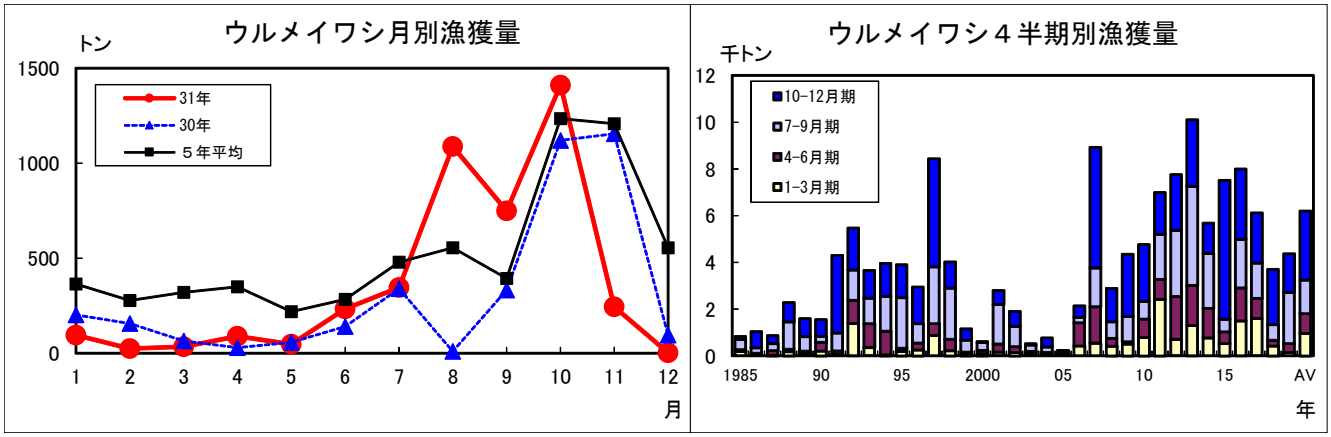

図 ウルメイワシまき網漁獲量変化(4 港計)

※平年値は過去 5 年の平均値(AV)，令和元（2019）年 12 月 25 日までの水揚量を使用

[カタクチイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のカタクチイワシの漁獲量は，昭和48年まで30万トン台で変動していましたが，昭和49年以降減少傾向となり昭和54年には13万トンとなりました。

その後は大きく増減を繰り返しながら増加傾向にあり，平成15年は過去最高の53万5千トンとなりましたが，その後減少傾向に転じ，平成29年は14万6千トンとなりました。

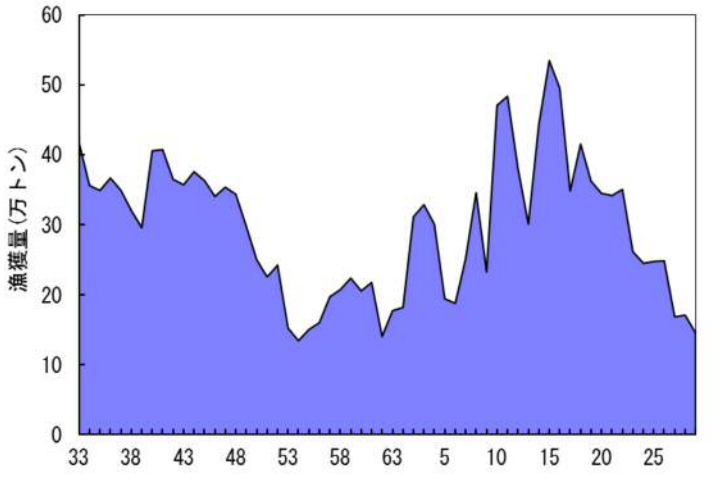

図　全国のカタクチイワシ漁獲量の推移

2. 県内の令和元（2019）年 10 ～ 12 月期の漁況の経過

【4 港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では，八代海・阿久根沖で漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では，漁場が形成されませんでした。

4 港計のまき網では，中羽（0 歳魚：2019 年生まれ）主体に 10 トンの水揚げで，前年の 64 %，平年の 1 %でした。

北薩海域の棒受網では，40 トンの水揚げで，前年の 123 %，平年の 107 %でした。

3. 県内の令和 2（2020）年 1 ～ 3 月期の見とおし

漁獲主体：小～中羽（1 歳魚：2019 年生まれ）

来 遊 量：低調であった前年並で，平年を下回る

（根　拠）

漁獲の主体は，現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

今期の漁獲の主体となる小～中羽の漁況は，前期低調に推移していることから，低調であった前年並で，平年を下回ると考えられます。

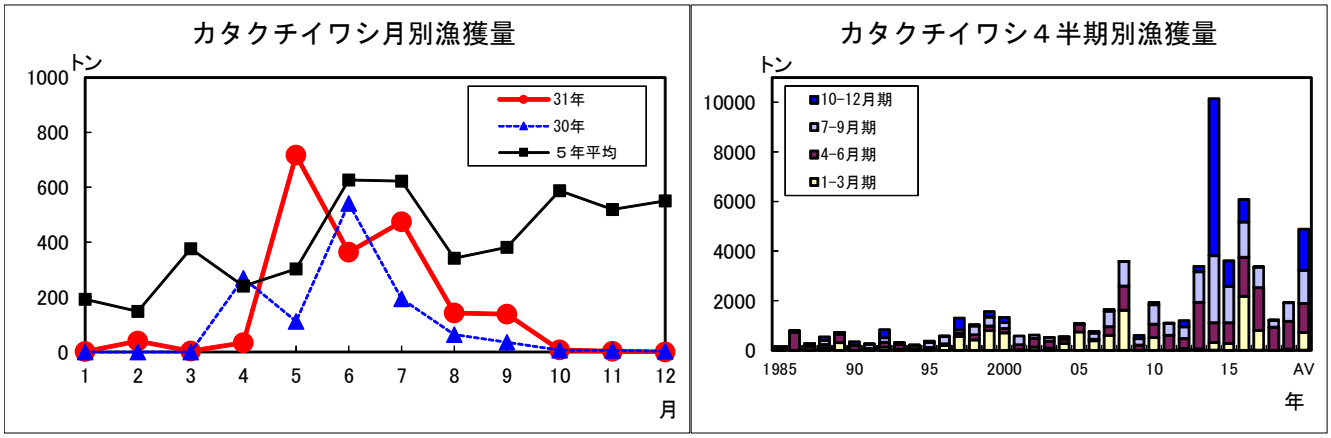

図　カタクチイワシまき網漁獲量変化(4 港計)

※平年値は過去 5 年の平均値(AV)，令和元（2019）年 12 月 25 日までの水揚量を使用

［シラス］

1. 経年経過

バッチ網漁業の漁獲量は，西薩海域では，平成 11 年の 5,450 トンをピークに減少傾向を示し，平成 14，15 年と 1,000 トンを下回り低調に推移しました。その後，平成 16 年は 3,507 トンと比較的好調に推移しましたが，平成 17 年以降減少傾向を示し，平成 30 年は 1,551 トンとなりました。

志布志湾海域では，平成 19 年まで増加傾向を示しましたが，その後，1,000 トン前後で増減を繰り返しながら推移し，平成 30 年は 956 トンとなりました。

2. 令和元（2019）年 9 ～ 11 月の漁況の経過

西薩海域では，カタクチシラス主体に 325 トンの水揚げで，前年の 46 %，平年の 72 %でした。

志布志湾海域では，カタクチシラス主体に 409 トンの水揚げで，前年の 121 %，平年の 83 %でした。

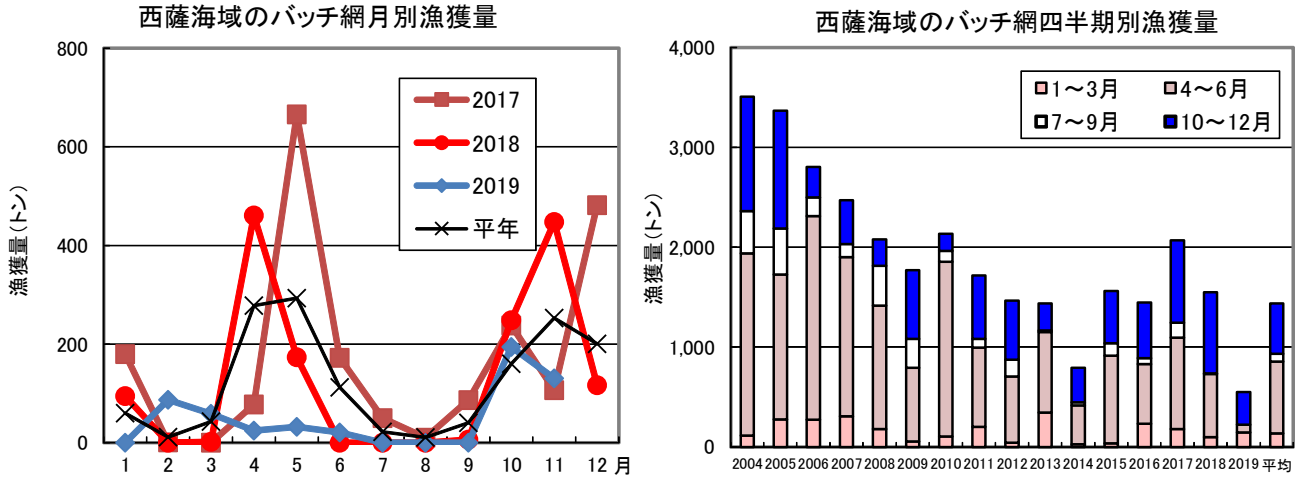

図　西薩海域バッチ網漁業の漁獲量変化(4 漁協計)

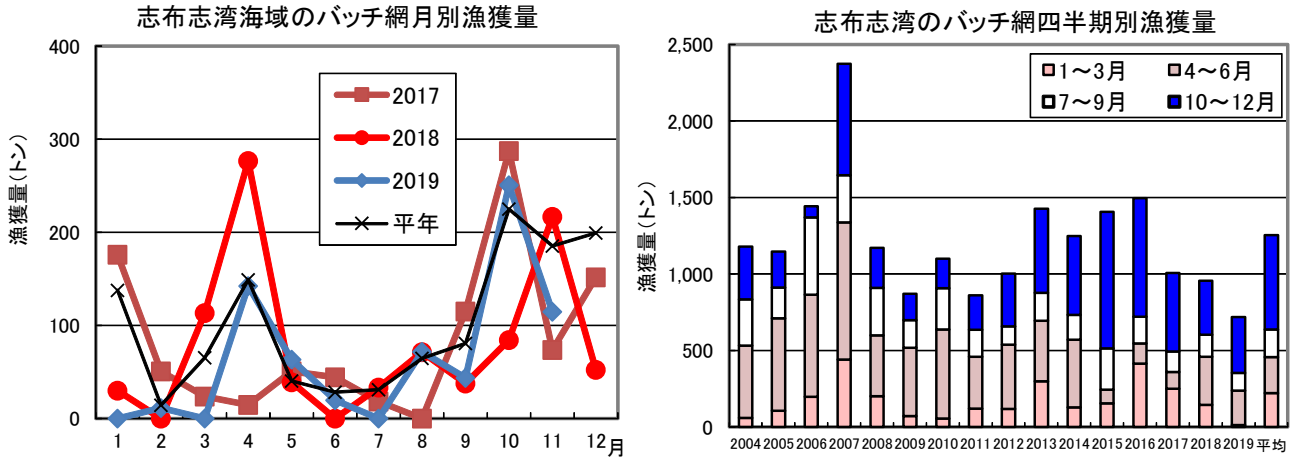

図　志布志湾海域バッチ網漁業の漁獲量変化(2 漁協計)

※平年値は過去 5 年の平均値(AV)，令和元（2019）年 11 月 30 日までの水揚量を使用

[イワシ類参考資料]

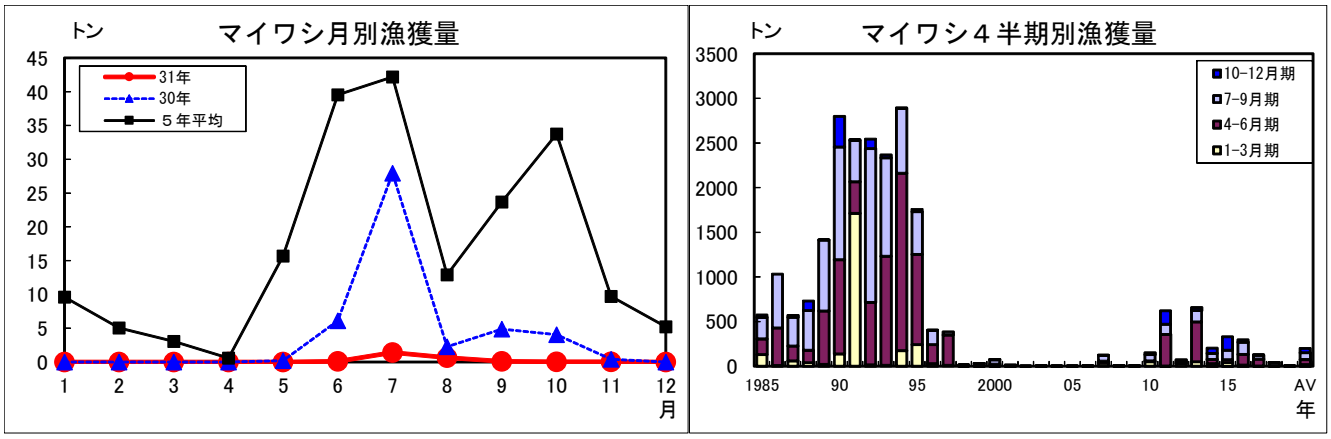

図 マイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

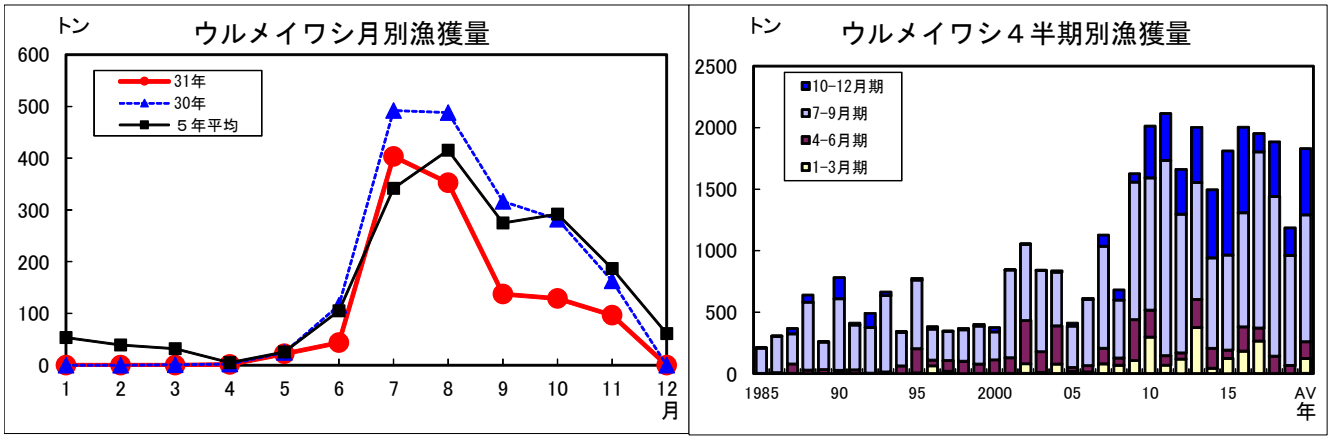

図 ウルメイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

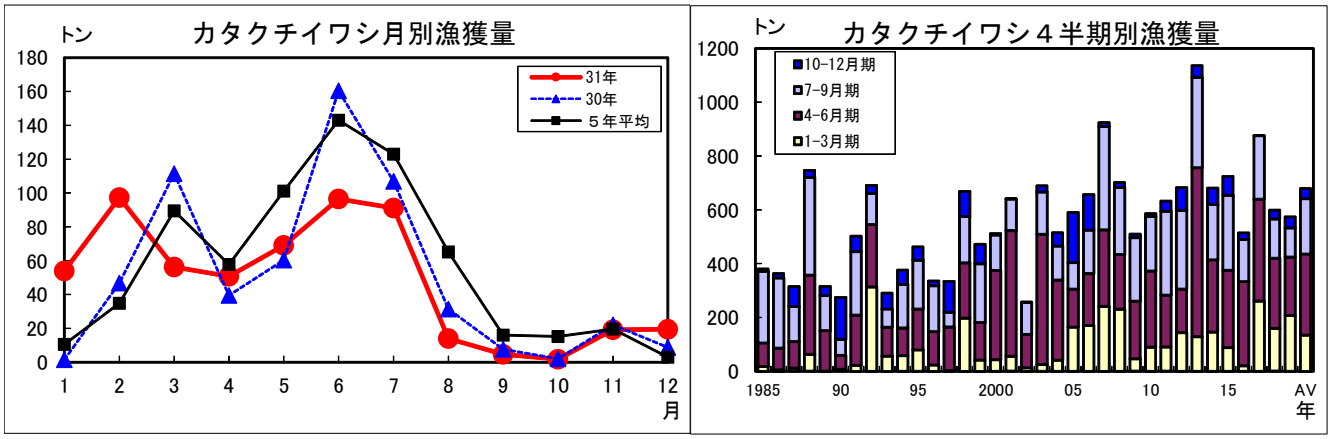

図 カタクチイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

※平年値は過去 5 年の平均値(AV)，令和元（2019）年 12 月 25 日までの水揚量を使用

[参考：漁況経過のみ記載]

〈ムロアジ類（クサヤモロ，モロ）（水産技術開発センター調べ：4 港計)〉

県内の令和元（2019）年 10 ～ 12 月期の漁況の経過

ムロアジ類の漁獲量は，平成 2 年の 21,700 トンをピークに急減し，平成 6 年以降は，1,500 トンから 5,000 トンの間での推移しており，令和元年は 3,627 トンとなりました。

4 港計のまき網では，島間沖，屋久島南，臥蛇島，口之島でクサヤモロ豆，小主体の漁場が形成されました。期全体で 2,592 トンの水揚げで，前年の 209 %及び平年の 204 %と好調に推移しました。

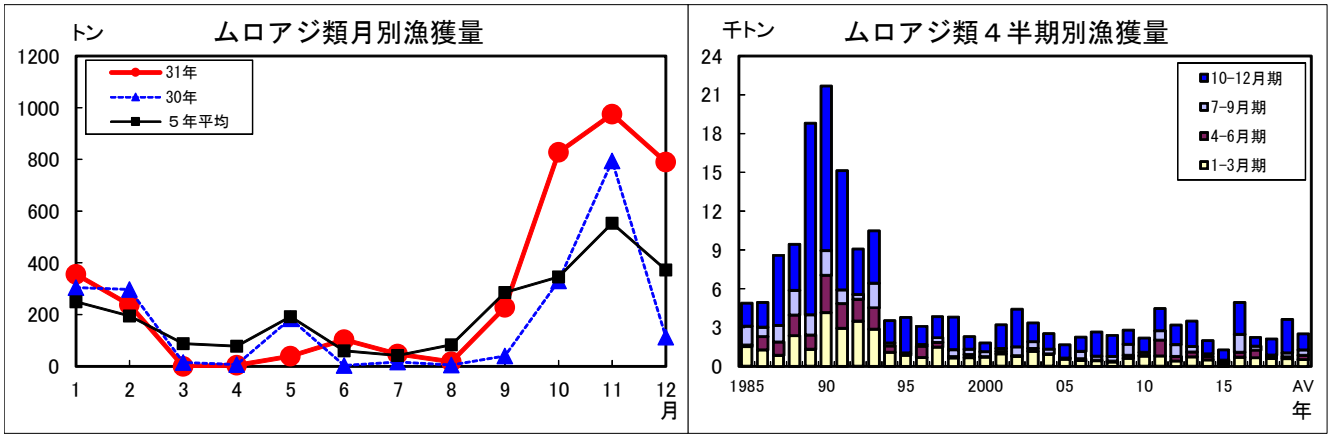

図 ムロアジ類まき網漁獲量変化(4 港計)

※平年値は過去 5 年の平均値(AV)，令和元（2019）年 12 月 25 日までの水揚量を使用

〈オアカムロ（水産技術開発センター調べ：4 港計)〉

県内の令和元（2019）年 10 ～ 12 月期の漁況の経過

オアカムロの漁獲量は，平成元年の 5,300 トンをピークに一旦減少し，平成 7 年に 4,400 トンと再度ピークを迎えた後は減少傾向となっていました。平成 20 年に一旦増加したあと再び減少傾向を示しましたが，令和元年は 1,211 トンとなりました。

4 港計のまき網では，主に屋久島南，西新曽根で様々な銘柄が漁獲されました。期全体で 411 トンの水揚げで，前年の 71 %及び平年の 164 %でした。

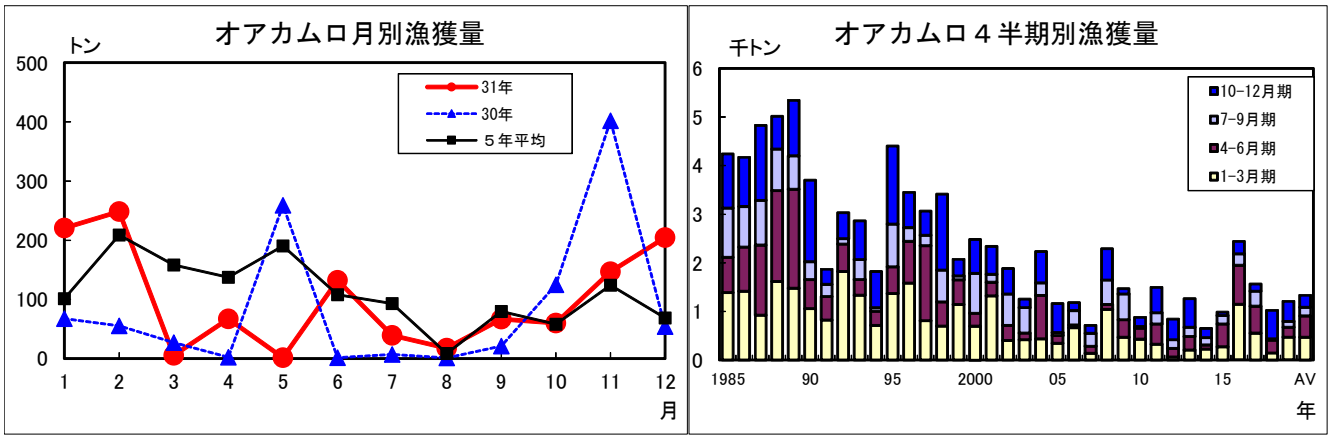

図 オアカムロまき網漁獲量変化(4 港計)

※平年値は過去 5 年の平均値(AV)，令和元（2019）年 12 月 25 日までの水揚量を使用

〈マルアジ（アオアジ）（水産技術開発センター調べ：4 港計）〉

県内の令和元（2019）年 10 ～ 12 月期の漁況の経過

マルアジの漁獲量は，昭和 62 年から平成元年に 1,500 トンを超えるピークがあり，その後低調に推移し，平成 12 年から 15 年に再度ピークを迎え 15 年には 3,150 トンと最高を記録しましたが，平成 16 年以降は低調に推移し，令和元年は 361 トンとなりました。

4 港計のまき網では，八代海，宇治で小，中主体の漁場が形成されました。期全体で 81 トンの水揚げで，前年の 130 %及び平年の 117 %でした。

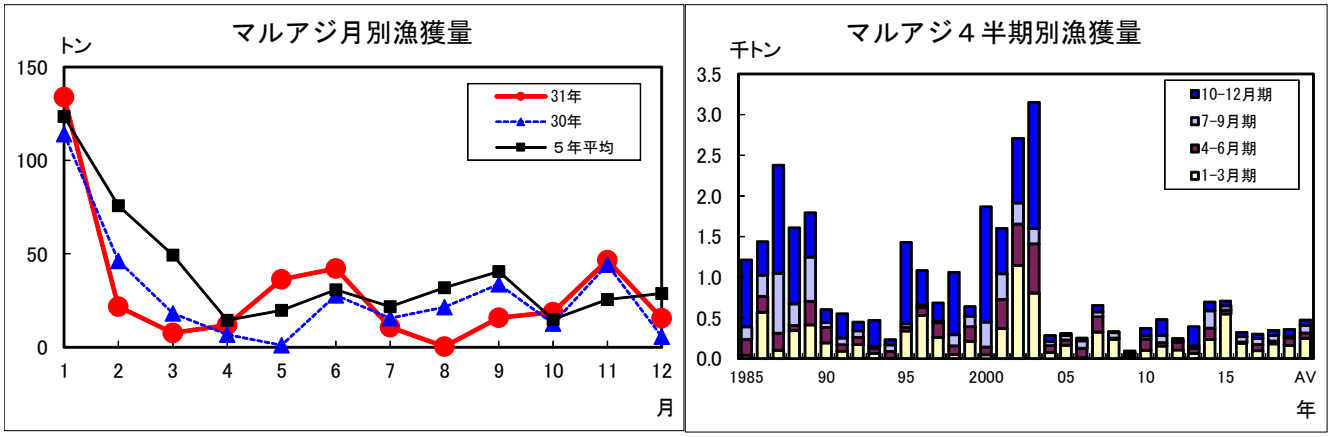

図 マルアジ（アオアジ）まき網漁獲量変化(4 港計)

※平年値は過去 5 年の平均値(AV)，令和元（2019）年 12 月 25 日までの水揚量を使用